

ウィリアム・バトラー・イエイツ

5 モル・マギーの歌

子供たち こっちにおいで
ぶつぶつ言いながら歩いているからといって
お願い おいらに石を投げないで
このモル・マギーを可哀想と思って頂戴

おいらの旦那は 近海^{ちかほ}で網を張る 5
貧しい漁師だったの
おいらの仕事は 日がな一日
ニシンの塩漬けさ

時たま 塩漬け小屋から戻る時 10
脚が棒になって歩けないこともあったりして
綺麗な月明かりのもと
石ころ道を難儀したものさ

もともと体力は無い方で
おまけに赤ん坊^ほが生まれたばかり
昼間は近所^みの人が着てくれて 15
夜から朝までおいらの番で

おいらは赤ん坊^ほの上に俯^{うつぶ}せてたの
可愛いお前たち 聞いておくれ
凍るような寒さの 物音ひとつ無い朝が来て
おいらは 冷たくなった赤ん坊^ほをまじまじと見つめた 20

疲れ果てて そんなにも眠りこけてしまったおいら
旦那の顔は最初は真っ赤に それから真っ青に
手切れ金を渡されて 帰れと言われたのさ
おいらの生まれた港町キンセイルに戻れとね

旦那はおいらを追い出し 扉を閉めて 25
「人で無し」と喚くのだった
誰とも会わないように用心して

おいらは黙って立ち去った

家々の窓も扉も閉められており
星が一点 微かに青白く輝いていた 30
人気の無い小道に
藁くずが舞っていた

おいらは黙って立ち去った
マーティン爺さんの牛小屋の先で
物腰の柔らかな顔見知りの婆さんが 35
朝の火を起こしていた

婆さんは 事情を聞いてくれた
一銭も持ち合わせていなかったが
婆さんは 哀れむような蔑むような目をして
ひとかじりのパンとスープを恵んでくれた 40

旦那はきつと
呼び戻しにやってくるさと 慰めてくれた
でも おいらは相変わらず彷徨っている
時には軒下に身を寄せ 時には野宿しながら

薪割りしたり 芝地を掘ったり 45
井戸水汲みの日銭稼ぎをしてる時
おいらはいつも赤ん坊のことを思っている
そして独り 悲しみの歌をうたっている

時々思うんだけど 赤ん坊にはわかってたんだ
神様が扉を大きく開いて 50
それは神様のロウソクなんだが 星を明るく灯される時
神様は貧しいものたちを見つめてくださっていたのだ と

だから 小さなお前たち
おいらに石を投げるのはお止め
こっちに寄って そのキラキラした目で 55
モル・マギーをよく見て 可哀想とっておくれ

(山中光義訳)